

第3章 ここにはすべてがある ～インド～

この旅行の後、私は長かった学生生活を終え社会人となる。

3.1 デリー

3.1.1 夜の到着便 1997年2月27日(木)

今日は朝早い出発だった。今、とりあえずこうして宿が決まり落ち着いているが、空港に降り立ってぼつんと一人になった時は、どうすればいいのかわからず不安になった。バスを待っているところで日本人に話しかけられ、彼も一人だというので一緒に宿探しをしようということになった。

ニューデリー駅近く、メインバザールで宿探しをし、声をかけてきたインド人の兄ちゃんについて行ってそこに決めた。一人 Rs100 (100 ルピー)。トイレ・シャワー付きである。名前は HOTEL RAVEENA PLACE DX。

インドは思ったより寒い。夜だからかもしれないが、日本を出たときのままの格好で良い。一人だったらこうやって今、宿に泊まっていられるかどうかわからない。いやー本当に不安だった。ちなみに、一緒にいる彼は大東文化大のS君という。

メインバザールはもっと車の走りやすい道路かと思っていたのだが、実際は、まるで路地裏という感じだ。最初は一人旅ということでわくわくしたが、空港を出た時のあの不安はすごかった。めぐり合わせに感謝感激である。

さて、3月12日にカルカッタで亮^{りょう}と会う予定だが、会えるだろうか。一人になってみたくもあるが、夜一人で宿探しは本当に不安だ。薄井¹、大丈夫か？

この旅行、トラブルが無ければ良いが、いずれ何かが起こるだろう。その時、自分の知らない自分を発見することになるのかも知れない。インドを楽しむ余裕を持とう。久しぶりに日本を出たんだ。きっとまた新しい眼が開かれるに違いない。おやすみ。

3.1.2 洗礼 1997年2月28日(金)

靴にうんこ付けられた。

¹東京工業大学の小俣研究室の同僚で、山登りが趣味の男。彼のインド到着はこの数日後であり、私とは別の日程でインドを旅行した。彼にとってはインドが初の海外、初の一人旅であった。

「靴が汚れてるよ。クリーニングしてあげる。」

と言われ、足もとを見たら右の靴に牛の糞が付けられていた。足の甲に自然に糞が付くはずはなく、知らないうちに付けられたのだ。朝、出かけてコンノートプレイス中心の噴水へ向かう途中の出来事で、少々不快だったが、インドを語る上でちょっとしたエピソードである。まあ、そんなもんだと思えばあまり腹は立たない。S君は

「なんだ、あいつ。殴ってやれよ。」

と言っていたが、それはまずいよ。でも後から靴を洗っている時にちょっと腹が立ってきた。

今朝は荷物を背負って宿を出て、まずツーリストオフィスへ行った。そしたらしきりにインドは危険危険と言われ、ツアータクシーを雇えと勧められた。

「値段は安いぞ。何が問題なんだ。」

と言われたのだが、それをやってしまうとただのバック旅行のようになってしまう。それはいやだ。なんとかごまかして出て来た。

二人で歩きながら、私が見かけた公園などに入っていこうとすると、S君は

「襲われそうだよ。やめとこう。」

と言って行こうとしない。そんなことないと思うんだけどな。無理強いすることもできないので、私はいくつか見たいところはあったが足を踏み入れずに通り過ぎた。

途中、一人旅の日本人の女の子に声をかけられた。彼女はとても元気はつらつとした様子で、ニューデリー駅への道を聞いてきた。なんだかとても生き生きとしている。私たちは彼女の後姿を見送りながら、声をそろえて

「たくましいなあ。」

とつぶやいていた。

街をうろろした後、メインバザールに戻って今日の宿を決めた。昨日の宿よりもっとメインバザールを奥に入った、AMAR HOTEL というところだ。二人で Rs300 である。値段相応の、良い宿だと思う。ここなら何回でも泊まれる。少々難を言えば、通りに面した部屋なので車その他の音がしてうるさい。でもそれほど気にはならない。

荷物を置いた後、宿の近くの APPETITE というレストランで 14 時ごろ昼飯を食った。私は Egg Kurma というのを注文したが、出てきたものは日本語で説明すると「カレー」と言うしかない。ゆで卵が、ごろんとまるごと 2 個入っていた。それと、Plain Lassi を飲んだ。私が面白がっていると、S君は疲れた様子で

「まだ食事の味を楽しむ余裕はないよ …」

と言った。確かに味自体にはあまり感動はなかったけど、インドでの初飯なんだし、もうちょっと楽しもうよ。彼とは少し感覚が違う … 内心そんなことを思いながら、お店のお姉さんが美人だったので思わずそちらへ目が行ってしまった。

明日は鉄道の予約に行こう。

3.1.3 オールドデリーの人々 1997 年 3 月 1 日 (土)

今日はニューデリー駅の予約オフィスへ行き、アーグラークアント駅行きの切符を買うのに午前中全てを費した。非常に疲れた。昼飯は彼の望みで、高いレストランで食べた。彼

とはどうも興味の湧くところが違い、行動を共にしにくく感じていた。午後は別行動ということにし、宿は同じところにもう一晩泊まることにした。

午後はとてもとても楽しかった。まず徒歩でルール・キラへ行った。その途中、裏通りを沢山見ることができ、普通の人々の暮らしを垣間見ることができた。宿の周辺と違って、視界には日本人どころか外国人旅行者らしき人々の姿は一切ない。私に変な日本語や、商売じみたセリフを言うてくる人は誰一人としていない。ときどき挨拶してくれたり、ここはどの辺か尋ねると笑顔で教えてくれたりした。

過去と現在が溶け合っている街並み。人は多いし騒音も凄いのだが、なぜかニューデリー周辺のように腹立たしさが無い。車をよけて通りを行き来するのも、人ごみの中を向こうから来た人とすれ違うのも、何だかとても楽しかった。

ジャーマスジッドが視界に入ってきたときも何だか嬉しかったが、ルール・キラの城壁は圧巻だった。広いせいもあるが、その周りの土地に幾らかの余裕を持たせているので、より荘厳に見える。入口でおばさんに、インド国旗の小さな紙をピンで胸のあたりに付けられた。

「No! No!」

と言ったら、別に金は払わなくても良かったらしく、その小さな国旗はその後、嬉しくてずっと付けたままにしておいた。ルール・キラの中はとても穏やかな雰囲気、ずっとそこにいたいと思うようなところだった。芝生には人々が寝転んで休んだり、展示のある建物の中も人があまりなくて、ゆっくり見ることができた。POST OFFICE が中にあったので、親と亮に葉書を出した。

ルール・キラを出た後、チャンドニーチョウクを歩いたのだが、ミシンをまわしているテイラーは見付けられなかった。しかしあるおじさんに声をかけられ、見るだけと言われて入っていった店でクルターとパジャーマを買った。買ったかったのだが普通どれくらいの値段なのかかわからず、最初 Rs800 と言われたのを Rs600 にまで値切った。しかしそれでも高すぎたらしい。普通、高くても Rs200 ぐらいで上下そろえられるらしいのだ。人にこれを言うと「やられたなあ」と言われてしまうかもしれないが、おじさんとの会話がとても面白かったので、あまり損をした気がしない。楽しい思い出のひとつなのだ。

その後も裏通りをあちこち巡りながら帰ったのだが、通りの名前などろくに表示されていないので、案の定、道に迷った。最後は足の裏にまめができ、自分にギブアップをしてリクシャーをつかまえた。

ニューデリー駅まで Rs25 と交渉して決めたのだが、おつりが無いと言われ、自分も Rs5 を持っていなかったので仕方なく Rs30 で手を打った。しかしそれも全くいやな気分ではなかった。それは、その運転手が Rs10 をくずそうとしてあちこちの人にあってみてくれたからだ。くずせずにどうしようもなかったので、Rs30 払った。

チャンドニーチョウクで Rs600 も使ってしまったので、もうルピーがちょっとしかない。現在手元にあるのは Rs38.5。飯も食えない。宿に戻る前に飲んだ Rs1.5 のチャイは本当にありがたくてうまかった。

さて、今日まで一緒にいた S 君はもうここにはいない。今日、彼はあるインド人青年（名前は聞いたのだが忘れた）と友達になり、彼の家でやっかいになることにしたそうで

ある。北の地方に家があるそうで、スキーもできると言っていた。そのインド人の彼は21才。多分学生だろう。ちょっとしか話をしなかったが、いい感じの青年だった。一緒に来ないかと誘われたが、本当の一人旅をしたかったので別の道に行くことにした。

一緒にここで写真を撮り、手紙でその後の報告をしようと約束し、握手をして別れた。お互い良い旅をしよう！元気で。

3.2 アーグラ

3.2.1 タージ・マハル 1997年3月2日(日)

今日は朝早く宿を出て、アーグラカントへ向かう列車に乗った。窓から眺める景色は、のどかな中にもたくましく生きる人々の暮らしぶりが見えてとても良かった。

アーグラカント駅ではおっさん(リクシャーの運転手)が車両の中まで入ってきて、降りると言われるまで着いたのがわからなかった。え？ここ本当にアーグラカント駅か？見渡したが駅名の表示はない。降りて近くにいた人に聞いたら、そうだと言う。そしておっさんのリクシャーを雇って、今日と明日、アーグラの足になってもらうことにした。しかしこれが、あやしいインドを体験する始まりであったのだ。

まず、今日は日曜日で BANK が閉まっているというのをおっさんに言われて初めて気がついた。どこか両替できる場所はないかと尋ねたら、あるあやしいオフィスへ連れて行かれた。ちょっとときどきしたが、持参した計算機を出して計算したら適正だったので、安心した。

その後、HOTEL AKBAR INN というところへ行ってもらい、そこに泊まることにした。Rs100の部屋は全てふさがっていたが、Rs80の部屋があったのでそこに決めた。しかしここは独房のような部屋で、ヤモリや虫がいたりする、ちょっとワイルドなところである。ベッドは寝るとかゆくなりそうだ。

午後はタージマハルやアーグラ城などをリクシャーでまわった。タージマハルは想像以上の素晴らしさであった。正門に立ったとき、奥行きのある美しい敷地の向こうに白い大きなタージマハルが見えた。一瞬にして、これまでと空気が変わった気がした。完璧である。これは本当にすごい。敷地を歩いて近くまで行くと、さらに想像よりも大きいのに驚かされる。そして美しい。靴を脱いで上がると、足がひんやりとして気持ち良かった。人がたくさんいるのだが、何か落ち着いた気分になされた。

敷地を南門へ戻るとき、ある人に声をかけられた。私はインドに来てからの癖で反射的に、

「No!」

と、きつく言ってしまった。するとそのおじさんは小さな声で

「No...」

と言って、すぐ引き下がってしまった。あれ？と思って目で追うと、どうやらそのおじさんはインド人の観光客で、シャッターを押してくださいと私に頼もうとしたらしかったのだ。これは悪いことをした。でもそこで初めて、いかに私が毎日「No」と言いまくって

いるのかを認識した。もはや人の顔も見ずに、話しかけられたらまず「No!」だったのである。

その後、リクシャーは布屋や大理石屋（ガバメントを名乗っているが、とてもあやしい）により、さんざん買わせようになつた。始めは見るだけでお金はかからないと言っておきながら、やはりあれこれ買わせようとしてくる。

大理石の店では、まず石に模様を掘ったり色のついた石をはめ込んだりしているところをみせてもらい、本物と偽物の違いの説明があつた。作業をしている人は2人だつた。なんだか、私が来たから急に作業を始めたという感じだ。リクシャーの運転手の話ではここまでだったので来たのだが、やはりその後には商売の話がないはずがない。商品の並んだ部屋へ通された。興味がないというと次の部屋へ通され、これはどうだ、というのを3回ぐらい繰り返された。次から次へと奥に部屋が現れるので面白かつたが、商品はよく見るとあまり良くなかつた。ガバメントだからこれだけの品質のものをこんなに安く提供できるんだと言っていたが、非常に嘘くさい。最後はどうとう、働いている人への寄付をねだつてきて、私が全く払う気がないとわかると、あからさまに不機嫌な顔になつた。

その後、今日あつた出来事のメインとも言うべき、宝石店へ連れていかれた。入れ替わり立ち替わり何人かのおっさんや兄ちゃんが出てきて、まさに『地球の歩き方』に出てくるトラブル例のまんまの展開となつた。私が店に入ってから、気づかないうちに入り口のドアは閉じられていた。どこから来たんだというような話から始まって、しばらくは普通の話をした。徐々に、鉄道のチケットを取ってやるから名前を書けと紙を出されたり、俺は宝石の輸出をしていると言ってあやしい商売の話をもちかけ、奥の部屋へ誘おうとしたり、いらぬと言うのにチャーイを出して来て、しきりに飲め飲めと勧められたりした。

それは、実を言うと内心とてもとても面白かつた！あまりにも典型的で、多分その時私の顔はニヤけていたに違いない。チャーイが出て来たときには、面白くて拍手したくなる程だつた。これって飲んじゃいけないんだよなー。Noというところをきちんと押えておけば、これは本当に楽しい出来事ではないだろうか。調子にのっていると痛い目に会いそうだが。

リクシャーは今日 Rs200、明日は Rs100、計 Rs300 ということにしてしまつたが、今考えるとこれはだまされているに違いない。ボられたんだろうな。宿に着いてから降りようとした時、ちょっと待てと言われてリクシャーに再び座らされた。おっさんは私に小声で話した。今日は Rs200 だと。おっさん、なんで小声なの？多分、ボってるから宿の人に聞かれたくないんだろう。しかし約束したのは自分だから仕方ないか。

アーグラは大体一日で全部見てまわれるので、もう明日にはバラナシ（ベナレスまたはバナーラスとも言う）へ出発したい。しかし鉄道の当日券が買えるかどうかはわからない。

この宿は部屋がもっと良ければ何日か泊まっていたい。それは、庭にテーブルと椅子が出ていて、あのペナンの弁慶ゲストハウスのように日本人やその他のツーリストと情報交換や談笑ができるからだ。とても楽しい。

明日はボられないことを祈りつつ、眠りにつこう。ヤモリよ来るな。

3.2.2 I'm Korean. 1997年3月3日(月)

朝早く7時半ごろ、アーグラークアント駅へ向かって歩いた。とても心地良く、歩くのを楽しんだ。思ったとおり、昨日着いた時に降ろされた駅はアーグラークアント駅ではないことが判明した。だまされた。

予約オフィスは混んでいて、なかなか順番がまわってこなかった。用紙がなかったので、私はどこにあるのか聞こうと思って並んでいる人に話しかけた。彼は自分が持っていた用紙と一緒に書けばいいよと言ってくれた。そしてその一人旅の韓国人 MUNJUN (私と同じ25才)と一緒にチケットを取ることができ、しばらく行動を共にすることにした。とりあえず待ち合わせ時間を決めて、私は宿へ戻った。

今日は特に予定はなかったので、ツーリストオフィスへ行って地図をもらい、宿の近くを散歩した。実は昨日のリクシャーのおやじが10時半に迎えに来る予定だったが、会いたくなかったのでわざとバス停から遅く帰ったのだ。宿に着いてみるとあのおやじは来てなかった。良かった。

散歩は同じ宿に泊まっている中川君と二人で、裏通りをいろいろと歩いた。デリーの裏通りとは少し違い、きれいできちんとした商店街と、きれいな家に住んでいる人々の町だった。とても良い雰囲気、観光などに行かなくてもそこに何日もいられそうだった。彼がサンダルが欲しいと言うので、ある店で選ぶのに付き合った。その親父はとても親切に細かな要求を聞いてくれた。いろんなサンダルを出してきては彼に履かせる。そして結局気に入ったのがなく、やっぱり買わないということになった。でもその親父は、そうか、別にいいよという返答だったのである。これは新鮮だった。インド人が怒らなかった。無理やり買わせようとしてこなかった。アーグラークは人が悪いと思っていたが、それは観光地のせいなのだ。こういう、普通の人たちが利用していて観光客があまり来ないようなところでは、ボッタくるようなことはしないのだろう。当たり前のことのような親父の態度が、とても気持ちが良かった。

しかし当然ここはインドで

「ハロー、サー。」

と言って手を出しながらずっと付いて来る子供はいた。また、軍関係の施設だと思うが、学校を含んだ広いきれいな土地へ2人で足を踏み入れた。軍の家族が住んでいる特別な地区のようなものだと思うが、そこは地図には何も載っていない。子供たちが合掌して

「ナマステー。」

と挨拶してくれた。でも入っちゃいけないみたいだ。出るところで呼び止められて、パスポートを見られている質問された。ちょっと怖かったが、日本人の旅行者だとわかると解放してくれた。入り口の守衛は我々に気づかなかっただろうか。それとも、あまりにも堂々と入って行ったから呼び止めなかったのかな。

MUNJUN と予約した列車は TUNDLA 駅発なので、そこまではバスを利用した。それはそれは窮屈で、つらいバスの1時間だった。あれはもういやだ。

今、TUNDLA 駅の待合室でこれを書いている。明日はバラナシだ。

3.3 バラナシ

3.3.1 ガンガー 1997年3月4日(火)

疲れたあー。列車がムガルサライ駅へ着いたのは午前11時頃だった。そこからバスに乗ったのだが、また前と同様の混雑ぶりで、立ったまま1時間以上かかった。その後、オートリクシャーを利用したが途中までしか行けず、ガンガーを見るまでにずいぶん歩いた。昨日会った1人旅の女の子とも列車から一緒だったが、ガンガーまで行く途中で、はぐれてしまった。Rs5 借りてるのに。

MUNJUNと二人で宿探しをし、HOMY GUEST HOUSE というところの、ドミトリーに泊まることにした。一晚 Rs25 だそう。ここは周りが静かがいい。今までは宿の近くはいつもうるさかった。宿で食べたチャーハンはとても旨かったが、夕食に外のレストランで食べたカレーはあまり旨くなかった。

そして、印象的な出来事がひとつあった。宿で記帳するとき、MUNJIN と私が韓国人と日本人であることを知った宿のおやじさんが

「はあ！ 韓国人と日本人が一緒にいるのか！」

と言って驚いていた。私たちは

「え？ 何驚いてんの？」

という感じだった。どうやら韓国人と日本人は仲が悪いと思われているようだ。

「一緒に旅してるのか。それはとてもいいことだ。うん。」

とおやじさんは言った。そんなに驚かれて、私たちはキョトンとしていた。

この宿のおやじさんはとても良い人だ。ここなら、あまり他の宿へ行こうとは思わない。しかし今日は本当に疲れた。しばらく何もしたくない。あ、ヤモリ君が天井にいる。虫の鳴声もするが、窓の外じゃなくて部屋の中で鳴いてる。うるさい。

3.3.2 夕暮れのガート 1997年3月5日(水)

夕暮れ時、ガートで子供達が凧上げをしている。兄弟らしき2人が私の座っている目の前を右へ左へと走り回っている。だんだん高く上げられるようになり、歓声をあげている。昔、自分もこのようにしていた頃があったであろう。近頃、日本では正月ですらこのような光景を見ることは無くなった。ガンガーの河沿いはとても落ち着く。ボートの客引きやハッパ売り等がいなければもっと良いのだが。

今日はガートをずーっとみて歩いた。マニカルニカーガートでの火葬も見たが、なぜだか特に何も感じられなかった。明日、朝早く起きてまた見に行くことにしよう。

ラームナガル城付近からの景色がとても良いというのを、アーグラの宿で聞いていたので、歩いて行ってみた。2時間くらいかかったが、途中の町がなかなか面白かった。その後、バナーラスヒンドゥー大学へ行った。やけに広いのに建物も少なく、あまり大学という感じはしなかった。しかし落ち着いた雰囲気があり、しばらくスタジアムでボーっとしてきた。大学の中にも牛がいた。

やはりバナナシはガンガー付近が一番良い。ガートではクリケットをして観客ともども盛り上がっていたり、子供が走り回っていたりしてほほえましい。

さて、明日はどうでしょうか。

3.3.3 沈黙 1997年3月6日(木)、7日(金)

記述なし。

3.3.4 無力の正露丸 1997年3月8日(土)

昨日まで下痢で倒れていた。バナナシに着いたのは4日、その日は疲れてただ寝た。5日、歩いてラームナガル城とBHU(バナーラスヒन्दゥー大学)へ行った。その翌日の6日、映画でも見ようかと思ったが、朝から何だか腹の調子がおかしい。トイレに行きたくなり、昼ごろ急いで宿へ戻ってトイレに入ったら、水のような便が出た。ひどい下痢だ。その後、体から水分は失われ、徐々に衰弱していった。

夜に宿のおやじさんが心配して見に来てくれて、

「水をたくさん飲んで、腹の中のものを全部出せ。」

と言われた。しかし、水を飲み過ぎて腹を冷やしたのが原因だと思われるので、水を飲めば飲むほど治るのが遅くなる気がした。でも水分は必要なので、一回に一口ぐらい飲むことにした。トイレに何回も通った。飯は食べられなかったので腹の中は空っぽだったが、一向に良くならなかった。ある時、眠っていると誰かに腕をつかまれて揺り起こされた。目を開けると、おやじさんが心配そうに私の顔を覗き込んでいた。そして、いいと言ったのだが医者を呼んでくれた。医者に処方箋を書いてもらって薬を買い、飲んだらすぐ良くなった。ものすごい効き目だ。いやー、しかし大変だった。

東南アジア旅行に続いて、今回もまた医者にかかってしまった。でも治って本当に良かった。今日は久しぶりに外へ出た。日差しがとても強く感じられ、歩くのが少々きつかった。両替のため State Bank of India へ行ったが、現地の人達と乗り合わせのオートリクシャーで、Rs10で行けた。帰りは Bank で会った日本人と一緒にサイクルリクシャーでゴドウリヤーまで乗った。それも Rs10 だった。その日本人の彼は現地の人といろいろ話をしてるらしく、面白い話を沢山話してくれた。宿に戻ってからはずっと今後の予定を考えていた。

今日、隣のベッドに新しい日本人が来た。南の方から旅して来たそうで、乗っていた列車が脱線事故を起こしたそうだ。結構大きなニュースになったようで、新聞の一面に載ったらしい。全然知らない。彼の話によると、プリーはとても良いところのようだ。バナナシよりプリーに多く行ったほうが良かったかなと思う。でも、スーリヤ寺院だけは一目見なければ。

明日は鉄道予約オフィスへ行ってチケットを取るつもりだが、取れるだろうか。それから、エアインディアへ電話してリコンファームしなければならない。今日、エアインディアのオフィスへ行ったが閉まっていた。結局電話だ。大丈夫だろうか。

鉄道の予約ができなければ、予定が大きく変わる。明日が勝負だ。

3.3.5 100ルピー 1997年3月9日(日)

今夜がバラナシ最後の夜だ。ほとんど何もしていないのに6泊もしている。早く抜け出したいと思いつつ、結構居心地が良いのかもしれない。

今日はバラナシ駅へ行って今夜発のチケットを取ろうとしたが、取れなかった。困ってしまい、どうしようかとベンチに座り込んで次の案を考えていると、職員の人が出て来て親切に相談に乗ってくれた。明日 10:10 発で翌朝の 7:00 頃着くという列車を教えてもらい、そのチケットを取った。ムガルサライ駅発だが、一番早いそう。本当に嬉しかった。その職員のおじさんは表情があまり変わらない人だったが、なんていい人なんだろうと思い、とても感謝した。

宿に一旦帰ってから、サールナートへでも行こうかと思い、再びバラナシ駅へ向かった。ただし徒歩で。Mall 通りの方にあるファーストフード店へ行って見たが、ちょっと思っていたのと違って。サールナート行きのバスを見付けるのが大変だったので結局サールナートへは行かなかったのだが、それから宿に帰るのがとても大変だった。

駅や歩いている途中の店でミネラルウォーターを買おうとしたが Rs100 札しか持っていなかったのも、みんな

「つりがない。」

と言って売ってくれなかった。のどが乾いてどうしようもなかった。つりがないとはどういうことだ。ここにお金がある。そして相手は水を持っている。それなのに誰も私に水を売ってはくれない。Rs100 札とは本当に金と言えるのか？ インドに対する怒りがこみ上げて来た。

車のクラクションも、「ジャパニー！」とかけられる声も、私をいらいらさせた。腹が立って、クラクションを鳴らした車に向かって

「うるせー！」(日本語)

と何度も叫んだ。細かい金がないので、リクシャーにも乗れない。仕方なく長い道のりを歩いた。途中何度か日陰で休みながら、ひたすら歩いて歩いて歩き続けた。あるところでサイクルリクシャーのおっさんに呼び止められ、おつりはあるかと聞くと

「私の知ってる店でくずせばいい。」

と言われた。連れて行かれた店で Thums Up を 1 本飲んだ。とてもうまくて、体に水分が浸みわたる感じがした。これでようやく細かいお金ができた。その後はそのサイクルリクシャーに乗ることにした。リクシャーのおっさんはこぎながら「サラサ、見るだけ。」とか「ガバメントの店。」とか、今までさんざん聞いてきた言葉を吐き続けた。とても疲れていたのも、それにノーと返答するのも億劫^{おっくう}だった。

ガートに着いて腰を降ろしていると、子供が絵葉書を売りにやって来た。安かったので何枚か買い、絵柄になっていたヒンドゥーの神の名をいくつか教えてもらったりした。他の子供たちが売りに来ても、その子が

「この人は僕から買ったからもう買わないよ。」

というようなことを（多分）言って、ガードしてくれたのはうれしかった。

しばらくすると蛇使いが現れて、

「ハロー、ジャパニー！」

と言って、頼んでないのに勝手に目の前でコブラを出して笛を吹き始めた。周りには私を中心に人だかりができ、そのおやじはしきりに写真を撮れ撮れとジェスチャーをする。そして最後に籠のふたを差し出して言った。

「マネー。」

頑として払わなかったら、ヒンドゥー語で何か捨てゼリフを吐いて去って行った。その後はいつも通りボートの客引きがやって来たり、別の子供達が絵葉書を売りに来たりした。なんで落ち着いて座らせてくれないんだろう。放っというほしかった。宿近くでのクリケットを少々見物した後、宿のベッドへ戻った。

明日は朝早い出発だ。さらばパラナシ。長かった。早くプリー、コナーラクへ行きたい。あ、それから今日、エアインディアに電話してリコンファームしたが、意外に簡単だった。

3.4 コナーラク

3.4.1 脱出 1997年3月10日(月)

長い列車の旅だ。今日は朝7時に宿を出た。MUNJUNが宿の門の前まで見送ってくれた。ガンガー沿いを少し歩いてから、ベニヤバーグまで徒歩で行った。バスでムガルサライまで行こうと思ったが、止まっているバスを見つけた辺りで、オートリクシャーの運転手がたくさん寄って来た。その中に、なんとRs10でいいというおじさんがいたので、それに乗ることにした。

この旅行中、どこでも必ず最後に良いこと、思い出深いことがひとつはある。今日のオートリクシャーはとても楽しいものだった。Rs10というのは、おそらく現地の人と同じ料金なのだろう。たまにこういういい人に会えるのは、とても嬉しい。

リクシャーは途中で人を拾いながら駅へ向かった。人の集まっているところに何箇所か寄り、おじさんが

「ムガルサライにいくぞー。」

と声を上げる。仕事へ向かう人々、通学の小さな子供達、その他いろいろな人が同乗者となり、降りていった。まさにインドの日常を見せてもらった。こんなに面白い体験を1時間もしてRs10は安い。いつも町中の移動でRs15ぐらい払っていたのがくやしい。なんて差だ。

列車は1時間程遅れたが、無事車中にいる。朝、ムガルサライ駅でトーストとコーヒーの食事を取ったが、久しぶりに飲むコーヒーはとてもおいしかった。車中でもチャイだけではなく、

「コーヒー、チャーイー。」

と叫ぶ売子が行ったり来たりしている。南へ向かうに従って、コーヒーも良く飲まれるようだ。

ムガルサライでフルーツケーキ(スポンジケーキ)とミネラルウォーターを買い込み、車中で横になっている。体の調子はいたって良好である。少々車内は暑い、扇風機が回っている。夜に腹を冷やさないようにせねば。

明日はスーリヤ寺院が見られる。

3.4.2 太陽神スーリヤ 1997年3月11日(火)

列車が止まっている。7:05着のはずであったが、今は8:25。辺りは霧がちこめていて、あまり遠くが見えない。視界50~100mといったところだろうか。太陽よ、照ってくれ。これから太陽神スーリヤの寺院を見に行くのだから。到着があまり遅くなると、予定が狂う。ハウラー(HOWRAH)行きの今夜のチケットが取れなくなるかもしれない。

8:40、列車は動き出した。しばらくすると車中に日光が差し込んできた。でもまだ空は白い。晴れてくれ。しかし腹減ったなあ。

プリーに着いてから今夜のハウラー行きのチケットを取り、駅近くのほったて小屋で飯を食った。現地の人しかいない店で、ダールとプリーとチャイを注文したのだが、値段が全部でなんとRs4。なんて安さだ！それからコナーラクへ行くため、サイクルリクシャーをつかまえてバス停へ向かった。途中、道端で魚を売っているのを見かけた。久しぶりに魚を見た。今までのところとは雰囲気がちよっと違う、ここは漁村だ。

| | | | | | | | | | | | | | | {

頭にきた。やはりここはインドだ。プリーから1時間程ぎゅうぎゅう詰めバスに乗って、スーリヤ寺院に11:30頃着いた。寺院の脇で手招きする男がいて、何やら7つの像が並んだ小さな建物の中へ誘われて入ってみると、お祈りを勝手にされ、

「51ルピー。」

と言われた。とても腹が立った。何か口ウソクのようなものを使ったので、一応Rs10だけ置いてさっさと出て来たが、一気に嫌な気分になってしまった。プリーに着いてからここまで、とてもいい雰囲気のところに入っていたのに、観光地はやはりこうなってしまうのか。悲しい。さらに、馬車をかたどっている寺院の車輪は思ったより小さく、期待していたほどの感動はなかった。あまりにも想像を膨らませすぎているのかもしれない。そして、本殿にあった本尊はイギリスが持って行ってしまっている。大英博物館にあるそう。これも腹が立った。

また、これを書いていると若者が3人来て、一緒に写真を撮ろうと言われた。彼らのカメラで撮ったのだが、あれはただ本当に私と写真を撮りたかっただけなのか、何か商売に利用するのはわからない。金は取られなかった。

考古学博物館を見た後、寺院近くのレストランで食べたドーサは安くて大きかった。スナック感覚で頼んだのに、一食分あって食べるのが大変だった。

| | | | | | | | | | | | | | | {

帰りのバスはまた混んでいたが、スーリヤ寺院から出るので座ることができた。ぎゅうぎゅう詰めの中、しばらくすると足元で何かが動いた。バタバタバタ…ええ?!びっくりして足を上げて見ると、そこには鶏がいた。うわ!なんだ?これ!どうやら隣りに座っているおばあさんのものらしい。何にも入れないでそのまま持ち込んだのかよ。その後はおばあさんが捕まえてずっと持っていた。あーびっくりした。

海だ!もう夕暮れ時だが、久しぶりに海の水に触れ、頭、手、顔、足に浴びた。なんて気持ちいいんだー。もっとここにいたい。これまでのインドのイメージとは違う場所だ。海岸は遠浅で、しかもほとんどビーチリゾート化していない漁村である。うーん、こんなところがあるならもっと早く来て長居したかった…。やはり海はいいねえ。

列車は21:00発だからまだ時間がある。しばらくここでのんびりしよう。でも、子供達にボトルをねだられたり、もの売りがしつこく来るのはやはりここもインドだということだ。

え?駅のWaiting Roomって金取んのか?プリー駅に2ndのWaiting Roomがあったので入ってみた。トイレに行ってからちょっと顔と手を洗って髪をとかした。今までの駅にもあったかどうか知らないが、初めて使って、

「うーん、便利だ。」

と感心していた。しかし入口にいた人がやって来て、

「2ルピー。」

何かちょっと嫌な気分だ。だったらもっと派手にシャワーを頭から浴びて、体中洗うんだっただ。しかもうんこ出なかったし。損した。

駅でフルーツケーキと水を買った。鉄道の旅にこのフルーツケーキはなかなか良い。でも今日は前買った時より高く、Rs20した。今回の席は寝台が狭い。足をまっすぐ伸ばせない。ちょっと小さめの席にあたってしまったが、これがインド最後の鉄道の旅だ。

さて、明日は亮に会えるのか?

3.5 カルカッタ

3.5.1 サダルストリート 1997年3月12日(水)

無事、亮に会うことができた。

今日は朝9:00頃HOWRAH駅に着き、歩いて地下鉄の駅まで行った。カルカッタは今までの中で一番都会である。なんか整い過ぎている。よくカルカッタからインドに入るとカルチャーショックを受けると言うが、そんなことはないと思う。

午前中は宿探しに奔走した。何軒かまわったがみんなFULLであった。Blue Sky Cafeの横にあるこのHOTEL PALACEに10時半ごろ来ると、部屋はあったが高い部屋しか空いていなかった。あきらめて出ていこうとすると、

「1時間程たったらもっと安い部屋を提供できるよ。」

と言われた。そこで、近くで暇をつぶしてから再び訪れた。

この部屋はRs175。今まで泊まった中で一番高い値段だが、部屋は最低である。正確に言うとも部屋自体ではなく、この値段でシャワー、トイレが共用になっていることだ。しか

し他の部屋には付いているようなので、部屋の外にあるが実質的には私専用となっている。しかしこれがひどい。照明はつかないし、シャワーは少ない本数の水が変な方向に勢い良く出て全然シャワーじゃないし、頭を洗っている最中に水が止まったりする。2晩泊まると言ってしまったから泊まるが、なんてひどいんだ。値段が高すぎる！でもベッドは2つある。無駄だ！カルカッタは好きになれそうもない。

亮とは12:00に観光局で待ち合わせだった。宿探しのために遅刻してしまったが、亮は待っていてくれた。不思議な気分だ。懐かしい顔がインドにいる。思わず手を差し出し、握手した。ここへ来るまでにいろんな面白いことがあった。ここから旅を始める彼に、話したいことが山ほどある。

エアコンが効いていて涼しい観光局の中に入り、しばらく話をした。この観光局は全然うるさいことを言ってこないで、のんびりできていい。2人でしばらく話していると、台湾から来たという旅行者が話しかけてきた。彼は東京の地下鉄路線図のハンカチを持っていた。どこで買ったんだろう。日本語の勉強をしているそうで、いろいろと日本語を聞かれた。インドで台湾人に日本語のレクチャーするとは思わなかったな。

観光局を出てからは、2人でヴィクトリア記念堂へ行った。これも白い大理石の建物だが、ヨーロッパスタイルだ。中は博物館か美術館のようになっている。でもこれまでの旅の話をしながら見ていたので、何を見たのかあまり印象に残っていない。

アイスクリームがうまかったから是非食べてみると誰かに言われたのを思い出したので、道端のアイスクリーム屋で初めて買って見た。選ぼうとしたら、勝手にスプーンを差して「ほら」と出された。あまりうまくなかった。私たちが買ったら、その兄ちゃんもアイスクリームのワゴンとともに風のように姿を消してしまった。なんだあのアイスクリーム屋は。あまりの素早さに、2人でちょっと笑った。

亮は今夜の列車でバラナシへ向かった。その後、私は一人で街をぶらぶらし、映画『ラジャ・ヒンドゥスタニ』を見た。これはインドで、なんと99週間もロングランしている映画だ。ポスターに99と書いてあるのでそう思ったのだが、もしかしたら99週間という意味ではないかもしれない。でも今インドで大ヒットしている映画には違いない。インドでは誰に聞いても知っていて、話が盛り上がる映画なのだ。途中ちょっと間延びして疲れたが、最後はまた盛り上がってハッピーエンドだった。場内の人々の反応も面白かった。映画だけでなく、場内の雰囲気も楽しい。でも場内はもっともっと盛り上がるかと思っていたのだが、それ程でもなかった。

帰りに宿の前で食ったサモサとチャイはとてもうまかった。

3.5.2 Hero No.1 1997年3月13日(木)

今日は南の方にある大きな池の公園(名前がわからない)へ行った。とてもいいところだった。その近辺も歩いたが、日本の住宅街に似た、落ち着いた雰囲気の町だった。池では沐浴している人達や、日陰で寝ている人などがいた。池の端から端まで歩いて30分くらいだったが、歩いて良かった。

カシミール州の物産店では、どうも日本人が馬鹿にされているような気がして、少し不

愉快だった。その店で土産としてカシミールの布を1枚、宿近くの店でダージリンティーと音楽テープを買った。

宿の近くでダージリンティーを買った直後、MUNJUN と再会した。まあ、カルカッタといってもツーリストはこの辺に集まって来るので、会ってもちっとも不思議ではないのだが。元気で良い旅を！

夜はまた映画を見に行った。『Hero No.1』という映画だ。なかなかクオリティーが高いと最初は思ったが、ストーリーがほとんどないに等しい。セリフもわからないので、みんなが笑っているところで笑えないのがくやしかった。でもものすごいところでロケしている映画だ。エッフェル塔の前で踊ったりしている。ヨーロッパの町中でロケした映像では、撮影を見物している人々が思いっきり映っていて笑えた。喫茶店のテーブルで2人の俳優が演技していて、そのまわりは全部一般の人々なのだ。みんな俳優の演技をじろじろ見ている。今回は2階席で見たが、この前見た1階の方が良かったと思う。2階はちょっと金持ちそうな家族しか来てなくてつまらなかった。

カルカッタは屋台の飯が充実している。タイの屋台にはかなわないが、安くてうまい。それに街がきれいなので、今までのところよりも心理的に安心して食べられる。タクシーの激しい往来がなければとてもいいところである。やはり飯のうまいところはいい。もっといろいろ食べたいなあ。

明日の今ごろは、もう飛行機の中だ。

3.5.3 最後までインド 1997年3月14日(金)

インド博物館にいる。広いのだが、あまりこれといって注目すべきものがない。まさにただの暇つぶしに来るところという感じだ。

ただ、わざわざ見に行ったコナーラクのスーリヤ寺院から運び出されて、ここにあるものがいくつかある。ちょっと腹が立ったのは、スーリヤ寺院前面の、欠けていた馬の頭部がここにあるということだ。なんでここにあるんだ！いくつかの像も持って来ちゃってるし。元あったところに戻せよ。それができないとしても、コナーラクの考古学博物館に置いておくのが正当じゃないのか？

しかしカルカッタは日本人多いなあ。町中を歩いていても、どこかの店に入っても、何を見に行っても日本人を見かける。

| | | | | | | | | | | | | | | {

地下鉄の駅で尾崎君という日本人と一緒にあって、今空港にいる。手続きがやっと終わった。搭乗券をもらうカウンターでの混雑ぶりというか、渋滞ぶりはすごかった。なかなか前に進まない。日本人の女の子達、シートへの記入ぐらい並んでるうちにすませといてよ。なんでそんなに時間かかってんの？

また、搭乗手続き前に飯を食おうということで、彼と空港内のレストランへ行ってみたのだが、いかにも高そうだったので入るのをやめた。他にないかとエレベーターで上に行くと、スタッフオンリーの食堂があった。スタッフじゃないけどいいかと聞くと、かま

わないというのでそこで食べた。そこは本当にインド人スタッフばかりで、搭乗客らしき人は一切いない食堂だった。二人でラッキーだねとか言いながら喜んでいて。

「まさか、値段もスタッフオンリーで、俺らは高いってことはないよね。」と冗談で言っていたら、なんとその通りだった。

やはりここはインドだ。最後まで気を抜いてはいけない。

3.5.4 いつかまた 1997年3月15日(土)

帰って来た。いつものことだが、あまり懐かしくない。2週間だから当然かもしれないけど。周りを見ると、ちらほらとインドから帰国したらしき汚い格好をした人がいる。私も結構汚れている。飛行機の中で飲んだビールはうまかった。日本食も食べたい。

一緒だった尾崎君は半袖に短パンで、荷物も海外旅行とは思えないほど少なかった。あれはすごい。しかも、彼の家は北海道だ。成田で一息ついてから、彼と別れた。彼のおかげで、空港内や帰りの飛行機も楽しかった。

果たしてインドとはどんな国なのか、自分はどう思うのか、これからはっきりして来ると思う。今この瞬間は正直言ってインドに戻りたくはない。「No!」と言いまくるのには疲れた。プリーには何日かいたかったが、他の場所は非常に疲れる。旅の途中で出会った人々は今ごろどうしているだろうか。インドには当然多くのインド人がいたが、多くの日本人もいた。それぞれにインドに対する思いがあるだろう。

ある本によると、インドは初め打ちのめされて帰って来て、しばらくするとまた行きたくなってしまふ。そしてまた出かけて、また打ちのめされて帰って来る。でもまたなぜか気になってしまうという国なのだそうだ。確かに魅力がたくさんある国だ。だが今、私にとって初めてのインドの印象を一言で言い表すならば、

「疲れた。」

これに尽きる。